「今後の県立高校に関する地域検討会議（第１回）」記録要旨【盛岡ブロック①】

平成 27 年６月８日（月）
盛岡市勤労福祉会館　４階 401･402 会議室

【田村　八幡平市長】

・東日本大震災前に行った地域検討会議にも参加した。今回改訂した今後の高等学校教育の基本的方向は、地域の方々の様々な意見を踏まえたものとなっていると感じている。
・この基本的方向には、「地元市町村との連携・協力の在り方も含め慎重に検討を進めていきます。」とあるが、これは具体的にどういうことを想定しているのか伺いたい。
・八幡平市も小中学校の再編は進めなければならない。再編の指針は定めているが、地元が了承するまで統合はしないというスタンスである。県立高校についても、このようなことを視野により良い再編に取り組んでもらいたい。
・岩手県は観光振興に力を入れているので、ガイド等を養成する学科の設置を検討してはどうか。

【佐野峯　滝沢市副市長】

・今回改訂した今後の高等学校教育の基本的方向は、様々な意見が反映されており大変良いと感じている。
・滝沢市はこれまで人口が増え続けていたが、平成 26 年度は減少に転じた。景気が良くなると県外、悪くなると県内という就職動向があるが、地元には良い企業がたくさんあるので、そこに就職し地元に定着する人材を育成して、人口減少に歯止めをかけるよう皆で取り組んでいく必要があると感じている。

【武田　新岩手農業協同組合常務理事】

・改訂した今後の高等学校教育の基本的方向は素晴らしい内容と思っているので、このとおりに再編を進めていただきたい。
・高校では基礎的な知識や技術を身に付けさることが大切と感じている。

【作山　岩手中央農業協同組合紫波地域営農センター所長】

・農業の担い手不足が深刻となっている。農業の大切さを授業の中に取り入れていただき、小さいときから農業の良き理解者を育てていただくようお願いしたい。
・農協としても地域の人材育成に向け協力していきたいので、地域との連携とはどのようなことを想定しているのか伺いたい。

【高橋　八幡平市商工会会長】

・各市町村とも人口減少、少子化の問題を抱えている。地元に若者を定着させる意味でも地元に雇用の場を設けたいと考えている。八幡平市は観光に力を入れているので、観光に関する学科を設置していただきたい。
・平舘高校とはインターンシップで連携を図っている。25 の事業所に 74 人の生徒を受け入れていただいており、今後も継続していきたいと考えている。地域振興のためにも、地域に密着した高校は必要であると考えている。

【阿部　滝沢市商工会会長】

・滝沢市の人口増加が止まった。滝沢市も産業の振興に力を入れ人材の定着に努めなければならない。県立大学とはインターンシップで連携をしており、産業界としても若者が地元に残るような支援をしていきたいと考えている。

（次頁に続く）

・少子化の進行は目に見えており、高校再編は進めていかなければならないだろう。地域の方々の様々な意見を聴き慎重に進めてほしい。

【岩崎　雫石商工会事務局長】

・少子化により高校再編はやむを得ないものと認識しているが、地元の高校は地域の街づくりとリンクしていることを考慮し今後の再編の進め方を検討してほしい。

・雫石高校はボート部、スキー部、郷土芸能委員会等は全国レベルで活躍しており、特色ある活動を行っているが定員を満たしていない。大人の視点だけではなく生徒が集まらない理由について中学生に意見を聴いて見ることも必要ではないか。

【冨岡　紫波町商工会副会長】

・紫波町はＪＲ等を利用して、盛岡から花巻方面まで通学することができる恵まれた環境にある。その中で、紫波総合高校はボランティア活動や祭り等で地域に根ざした活動を行っており頑張っている。

・紫波町にはオガールエリアがあるが、そこの宿泊施設を寄宿舎として活用し、紫波総合高校に町外から受け入れるような体制を作っていけたらよいと考えている。

・高校はある程度の人数がいるところで学ぶことが大切と考えている。少子化により、生徒数を確保できない小規模校については交通の便がよい紫波総合高校に集約していくことも検討してはどうか。

【井上　滝沢市立一本木中学校ＰＴＡ会長】

・滝沢市の中学生は、盛岡周辺の高校の選択肢が多く恵まれている。県内ではこのような高校の選択について必ずしも恵まれていない地域もあるので、地域性を考えた高校再編であってほしい。

【坂井　雫石町立雫石中学校ＰＴＡ会長】

・地域の人材育成のため、地域にある高校は存続していただきたい。高校では、魅力をさらに高めてより多くの中学生が志望するよう努力してほしい 。

・雫石町は、盛岡に近く様々な校種の高校を選択できるが、中には経済的な理由で盛岡まで通うことができない生徒もいるので、地元の高校は必要と考えている。

・再編を進めるにあたっては、定員を満たしていない高校をターゲットにするだけではなく、定員を満たしている盛岡の高校を再編することがあってもよいのではないか。

【佐藤　紫波町立紫波第一中学校ＰＴＡ会長】

・高校は、義務教育が終わって初めて自分の人生を選択する大切な時期である。生徒は、やりたい部活動があり自分の夢を叶えられる学校を選ぶことになると思う。魅力ある高校にしていただき、各校とも選ばれる高校となるよう努力していただきたい。

・中学生や保護者が高校を選択する際は、高校の立地条件も大きな要因となっていると感じている。

【遠藤　八幡平市教育委員会教育長】

・平舘高校の定員充足率は約 85％である。１学級定員を 35 人にすればほぼ 100％となる。きめ細やかな指導をするためにも学級定員の見直しを検討してほしい。

・基本的方向では、学級定員は 40 人を基本とするが特定の地域における独自の基準等、様々な視点から検討していくとある。独自の基準とはどういうものか伺いたい。

・市内の中学生 264 名のうち 93 名、約 35％が平舘高校に入学している。これを増やしていきたいと考えている。

・地域の高校は次の３点から必要であると感じている。一つは地域の人材育成のため、二つめは紫根染の製作など地域への貢献度、３つめはボランティア活動など地域に活力を与えることからである。

【熊谷　滝沢市教育委員会教育長】

・各地域の様々な意見を取り入れ基本的方向をまとめられたことに敬意を表したい。　（次頁に続く）

10 年前に地域懇談会の司会をした際、その時も多くの意見は学校存続に関わることであったと記憶している。いずれ、大事なことは子ども達の教育環境はどうあれば良いかということである。地域の様々な意見を聞いてまとめることが大切であると感じている。

・基本的方向に望ましい学校規模を原則として４～６学級程度とするとあるが、高校はある程度の学校規模は必要と考えているので、この基本は大事にしていただきたい。また、３学級以下の学校は地域の実情を考慮し進めていくとあるので、大変難しい問題であるがこの視点も大事にして地域が納得できるような再編を進めていただきたい。

【千田　岩手地区校長会副会長】

・葛巻町の中学校に勤務している立場から意見を述べたい。望ましい学校規模を原則として４～６学級としているが、葛巻高校は１学年２クラスの小規模校ながら進学、就職で大きな成果を上げている。また、部活動においても７つの部、３つの同好会がある。中学生からみれば 10 の選択肢があり、部活動選択においても支障がないと感じている。

・葛巻高校は葛巻町の地理的な立地条件からすると、町になくてはならない存在である。教育機会の保障の観点からも考慮していただきたい。

【和田　紫波郡校長会会長】

・矢巾町や紫波町は人口が増えてきており、今後中学校卒業者の推移と生徒の出願動向の差がどの程度出てくるか気に掛かるところである。

・中学生の進路意識が変化している。平成 27 年度入試では不来方高校が定員割れしたが、これは矢巾中学校と矢巾北中学校の希望者が減ったからである。そのような生徒は学力の面で自分の実力を試したい、地元ではなく他の高校に進学して部活動を強くしたい等を理由としている。必ずしも近くに高校があるから進学しようという意識ではなくなってきている。

・紫波総合高校は、進路意識が確定していない生徒にとって入学しやすく、教員にとっても進めやすい学校である。総合学科はそのような生徒にとってメリットがある学校であると認識している。

【　県教委　】

・地域との連携について、これまでも各市町村からは地元の高校に対して様々な支援をいただいているところであり、感謝申し上げたい。地元市町村との連携・協力については、生徒が減っていく中で、学びの環境をどのように保障するかということについて、お互いに知恵を出し合っていくことが必要ではないかということで、このような言葉を入れており今後協議させていただきたい。 産業界との連携については、生徒の職業観や勤労観を育成していくことが必要という意味でこのような言葉を使っている。

・中学生から意見を聞くことも必要ではないかという御提言については、今後、アンケートなど実施の方向で検討して参りたい。

・通学支援については、現在、統合に伴い公共交通機関がない場合に、市町村や保護者が運行するバスの運行経費に対して支援している。こういった事例等も踏まえながら今後の対応を検討して参りたい。

・学級定員を少なくした場合の財政措置については、これまでも国に対して要望を行っている。１学級定員を少なくした場合、国からの財政措置が減ることになり、現在と同じような人数を配置するとなると、県単独で負担することになり、復興を進めるなかでの県財政の状況を考えるとなかなか難しい。今後、他県の例も参考にしながら、一部の地域で導入が可能かも含めて検討して参りたい。

・望ましい学校規模とする１学年４～６学級については、科目ごとの専門教員の配置が可能であること、生徒が希望する部活動を設置できる等、子どもたちの切磋琢磨という点でも利点があることから望ましいとしている。

（次頁に続く）

ただ、今回の改訂では、学校規模に幅を持たせる意味で「原則」を加えたところである。

・観光に関する学科の要望については、かつて県立高校に設置した例はあったが、出口、卒業後の進路先の確保という課題があるところ。新たな学科の設置については、なかなか難しい課題がある。産業界のニーズや卒業後の進路先も見据え、様々な意見を伺いながら検討していきたい。

【田村　八幡平市長】

・市町村との連携協力については、各市町村に財政的な負担を求めているのではないか、という懸念を持っている首長さんたちが多い。例えば、１学級定員を少なくした場合に、国からの財政措置がなくなる分を各市町村に求められるのではないかとの不安がある。そういうことがあるのか伺いたい。

【　県教委　】

・各市町村に県から強制的に財政的な負担を求めているものではない。お互いに知恵を出しあうという意味での連携・協力である。学校の魅力を維持していくために、どうあればよいか考えていくことが大切である。

【田村　八幡平市長】

・教育の質を保証するためには､地元としてもある程度の負担はやむを得ないと考えている｡その時に､県として市町村が高校のために行う取り組みについて、国に対して交付税措置を求めるなど環境づくりも含めて検討してほしい。

【　県教委　】

・御意見としてうけたまわりたい。

【阿部　滝沢市商工会会長】

・ＩＣＴの活用について、県教委ではどのようなことをイメージしているか。

【　県教委　】

・小規模校での生徒の科目選択の幅を広げる方策として、遠隔授業等のイメージをしているが、具体的なことはこれから検討していきたい。

【　県教委　】

・文部科学省では４月から遠隔授業を認めている。ただし、授業の質を確保すること「双方向、同時、授業者はその学校の教員であること」が条件となっている。予算もかかることであるので、見通しを持ったうえで導入する必要がある。

【冨岡　紫波町商工会副会長】

・地域の代表として参加している我々では、地元の高校を再編対象にして良いという人はいない。ただ少子化の進行は目に見えているので、子ども達の立場に立った計画を進めてほしい。

・盛岡工業高校の建築・デザイン科は入試倍率が高く人気があるが、就職者のほとんどが県外に就職している。地元の企業に優先的に就職させる仕組みづくりはできないものか。

【田村　八幡平市長】

・当市では通学する区域に限らず定期代の支援をしている。統合により通学が困難となることがないよう対策を講じておくことが、再編をスムーズに進めることにもなると思う。寄宿舎等の整備についても検討が必要ではないか。また、高校でのクラブ活動だけではなく総合的なスポーツクラブ制についても検討が必要ではないか。

【遠藤　八幡平市教育委員会教育長】

・学科の在り方については、地域の要望を聞きながら中身を充実させる方向で検討していくことがあっても良いのではないか。柔軟に対応していただきたい。